

# 吹田市民の戦争史 ③

吹田市千里山にお住まいの森義輔さん(91歳)の故郷は四国の香川県。軍人一家に育った森さん、地元香川大学を卒業後、丸亀連隊に入隊。中国・天津で機関銃中隊の配属将校として悲惨な戦争を体験された。あの戦争から62回目の夏を迎える日本。戦争体験がどんどん風化していく中で、決して忘れてはならないこと、心に刻まねばならないことがあるはず。森さんに中国と日本での戦争体験を語っていただいた。



中国・天津で戦友と(右が森さん)この頃「戦争で死ぬことは全く怖くなかった」

## 腸のどび出した死体、ウジのわいた死体… 死と隣り合わせの日常—それが「戦争」なのです

**Q** 当時としては珍しく、旧制中学を出てから大学へ。そして昭和14年に陸軍丸亀連隊に入隊されるんですね

大学へ行ってた分だけ、兵隊になるのが遅くて、23歳で軍隊へ。新兵の研修が厳しかった。よく殴られたねえ。殴られた翌日は嘔めなくらい顔が腫れてね。まあそれが軍隊ですね。5年制の旧制中学を出たもの

は試験を受ける権利があった、研修を終えてから幹部候補生の試験を受けると、見事に合格。その後出征命令が出て中国へ。

**Q** 中国のどのあたりへ行かれたのですか？

行く先は全く告げられずに坂出港を出発し、着いた先が天津ですよ。万里の長城の入り口から上陸し、北京のそばの天津に「北支軍駐屯地」があったので、そこに配属されました。

**Q** 天津では激しい戦闘の繰り返しだったとか？

日本軍が占領しているわけですから。そこへ革命軍が攻めてくる。国民党の軍隊もいるわけですが、その時は一緒に攻めてくる(国共合作)ことはあまりなかった。

**Q** 死と隣り合わせですね

川を挟んで撃ち合う時でも、ピクピクしていたら逆に狙撃兵に狙われて殺されてしまふ。弾が飛んできたら一番最初に飛び出して機敏に動けば、それほど当たらないのです。銃の性能は日本の方が優れていますが、相手はチエコ製の機関銃で応戦する。

戦争はテレビゲームのようなものではないですよ。腸が飛び出ている死体も見ました。夏は遺体の腐り方が激しく、ウジがわいている死体なども。相手の遺体から鉄砲を奪って、それで闘ったこともありましたが、しかしその鉄砲、なんと日本製。つまり日本兵を殺して中国側へ奪われた鉄砲が、また日本側へ戻ってきたのです。

**Q** 天津付近にはどれくらいいたのですか？

配属されて4年ほどいました。よく殺されなかったと思います。しかし昭和16年に太平洋戦争が始まって、北支軍は南方へ転戦を命じられたのです。もしあの時、フィリピンやビルマなどに送られていたら、おそらく私は戦死していたでしょう。しかし、たまたま編成替えがあって、私はモンゴル方面へ転属を命じられたのです。

**Q** 運命を感じますね

私もそれまでは不思議と死ぬことは怖くなかった。しかしモンゴル方面への配置転換で、「これはもしかしたら生き残れる運命かも」と感じました。

**Q** その内に入った帰国命令が出るんですね

当時軍隊では「未来の軍人を増やすため」に、結婚を奨励していました。部隊で結婚希望者を募集したのです。希望者には1ヶ月の休暇を与えられるし、死ぬまでに一度親に会いたいと思って、嫁さんには失礼ながら(笑)、結婚を希望したんです。

**Q** 千里山でお見合いされたいんですね

いつ死ぬか分からん身で、「軽率に結婚したらあかん」とは思ったけれど、生き残る方に「運が向いてきたかな」とも思っていた時期なので、見合いました。何しろ休暇が1ヶ月しかないの、すぐに結婚を決めて和歌山へ新婚旅行に行き、やがて下関からブサン行きの船に



森さんご夫妻

**Q** 奥さんはすぐに未亡人になるかもしれない。今では考えられない結婚ですね

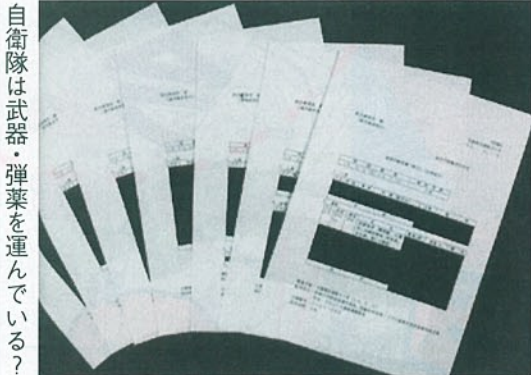
それまでは「お国のために」と死ぬのは怖くなかったですが、結婚してからは「嫁さんもらったんやから生きて帰らない」と思うようになりまして。妻は私が帰ってくるまでの3年間、毎

日ずっと佐井寺のいざなぎ神社にお参りしていたんですよ。いざなぎ神社のご利益なのか、科学では証明できないものが働いて、私は死なずにすんだのだと思っています。戦争はいつの時代も悲惨なもの。「命の大切さは、戦争した人にしか分からんでしょうね」。仲むつまじく写真に納まっていた、森さん夫妻の言葉が重い。

## マスコミ報道から消えた イラク・戦場—その実態

イラク支援特別措置法が2年間も延長され、航空自衛隊は隣国クウェートから戦場となったバグダッドまでせっせと「物資」を運んでいる。写真(上)は「航空自衛隊は何を運んでいるか」について情報公開を求めた時の回答であるが、見事に真っ黒黒塗りである。「国民に見せられないもの」、つまり武器・弾薬、米兵を運んでいると考えて間違いはあるまい。

イラクには大量破壊兵器はなかった。フセインはアルカイダとつながってはいなかった。アメリカがウソをついてまで始めたイラク戦争に、日本政府はいつまでつきあうつもりだろうか？



自衛隊は武器・弾薬を運んでいる？

写真(下)の女性は、アメリカのヘリコプターからの空爆で右腕を複雑骨折、破片が口の中に飛び込み、喋れなくなってしまった。バクーバという、現在最も空爆の激しい地域での出来事。

テレビや新聞からこのようなイラクの戦争実態が報道されなくなって久しい。3年前に日本人3人が身柄を拘束され、小泉前首相が「自己責任！」と叫んでから、ほとんどのマスコミはイラクから引き揚げた。「もし武装勢力に誘拐されたら、政府から睨まれる」ので、現場の記者、カメラマンは会社の命令に従って日本に戻ってきたのだ。かくしてイラク戦争がテレビから消えた。

被害の実態が報道されなければ、戦争の悲惨さは伝わりにくい。今のイラクでは1日に100人単位で人が死ぬ。そう、尼崎のJR事故レベルの被害が毎日繰り返されているのだ。実際のイラクの姿を



アメリカの空爆で右腕と口を受傷した女性

多くの人々に見てもらいたかったので、イラクで撮り貯めた映像をDVD「イラク・戦場からの告発」に編集した。憲法9条が変えられてしまえば、アメリカは日本に対してもっと戦争に協力するように要請してくるだろう。アメリカの戦争とはどのようなものか、ぜひこの映像を通して感じてもらえれば幸いである。

DVD「イラク・戦場からの告発」を5人の方にプレゼントします。ご希望の方は16ページ記載のFAXかメールで。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。応募のメ切りは8月15日。